

「物差し」を捨てるとき

茨城県 茨城県立並木中等教育学校 3年
井上 祐太郎 (いのうえ ゆうたろう)

Aさんは私の幼馴染だ。Aさんは生まれつき足が不自由で、車いすを使っている。そんなAさんと遊びの帰りに話していたときのことだ。私は、何気なく「毎日、大変だよな」と口にした。その瞬間、Aさんの笑顔がほんの少し曇ったように見えた。彼女は「まあ、慣れているから」と笑ったけれど、その返事は私の胸の奥に小さなひっかかりを残した。

家に帰ってからも、その場面が頭から離れなかった。「大変だよな」という言葉は、励ましのつもりだった。しかし、もしかしたら私は、彼女の生活を「大変」と決めつけ、同情するような立場から見ていたのではないか。Aさんにとっては、車いすは日常であり、当たり前の一部だ。それを「大変」と言われ続けることは、自分の生き方を特別視されることにつながるのではないか――そう思い始めた。

Aさんとは、中学に入ってから一緒に遊んでいる。Aさんはいつも明るく、周りを笑わせる存在だった。スポーツや手芸など様々なことを楽しんでいて。そんな姿を見て、「努力していてすごい」と私は何度も思った。けれど今振り返ると、その「すごい」という評価も、私の中の物差しから出た言葉だったのかもしれない。

次の日、私はインターネットで「無意識の偏見 (アンコンシャス・バイアス)」について調べてみた。それは、人が気づかないうちに抱いてしまう偏ったものの見方や考え方のことだと書かれていた。「女性だから家事が得意」「高齢者は体が弱い」「障がいがある人は何もかも不便」というように、根拠のない思い込みが、知らないうちに人を傷つけることがあるらしい。

ある調査では、日本人の約6割が「無意識の偏見を見聞きしたことがある」と答えているという。私は画面の文字を見つめながら、自分の言葉がまさにそれだったのだと気づき顔が熱くなった。

改めて思い返すと、私の周りにも偏見の例は少なくなかった。例えば、小学校の頃、クラスに外国から来たばかりの転校生がいた。日本語がたどたどしいという理由だけで、「勉強ができない」と決めつけられていた。実際には、彼は数学が得意で、私よりもずっと速く計算を解いていた。

また、ある男子は「男のくせに泣くな」と先生に叱られていた。泣くことは自然な感情の表れなのに、性別を理由に制限されてしまっていた。今思えば、これらも無意識の偏見だったのだ。

数日後、Aさんと再び話す機会があった。私は思い切って、「この前の言葉、もし嫌だったらごめん」と伝えた。するとAさんは「正直、あんまり言われたくないかな。でも気づいてくれてありがとう」と笑った。その笑顔を見て、私は胸のつかえが少し取れた気がした。

この出来事をきっかけに、私は普段の会話でも「相手がどう受け止めるか」を意識するようになった。自分では優しさのつもりでも、それが相手にとっては重く感じることもある。だからこそ、相手の立場を尊重し、知ることが大切だと学んだ。

ニュースや本の中にも、似たような事例は多く紹介されている。ある視覚障がいのある男性は、駅で「大丈夫ですか？」と何度も声をかけられ、「親切心はありがたいが、過剰な手助けは自立の妨げになることもある」と話していた。これを読んだとき、私は自分の行動を重ねて考えずにはいられなかった。

人権とは、誰もが自分らしく生きる権利だ。それは特別な人だけにあるものではなく、すべての人に平等に与えられている。だから、相手を「特別な存在」として扱うことも、時に壁を作る原因になる。相手の立場や状況を想像しながら、必要なときに必要なサポートをする—それが本当の意味で人を尊重することだと感じる。

私はこれからも、自分の中に潜んでいるかもしれない「無意識の偏見」に気づき、手放していきたい。そして、誰かの当たり前を、私の物差しで測らないようにしたい。もしこの意識を一人ひとりが持てたなら、社会はもっと温かく、安心できる場所になるだろう。学校も、職場も、街も、誰もが安心して過ごせる空間に近づくはずだ。

夕日の下で交わした小さな会話は、私に大きな学びをくれた。それは単なる友達とのやりとりではなく、「人を尊重する」という生き方を考えるきっかけだった。そして、この経験を胸に、これから出会うすべての人と向き合っていきたい。